

伏見城を描いた洛中洛外図屏風について

名古屋市博物館学芸員 津田卓子

流転の城

文化史の一区分として「桃山時代」はある。いかにも秀吉が栄華を謳歌した時代に似つかわしいような時代名称だが、その所以となった伏見城については、案外知られていない。

かつて伏見城は、京の南東、現在の京都府伏見区桃山にあった。30年あまりの間に拡張および再建を繰り返したため、その歴史は複雑の一言に尽きるのだが、現在の研究ではⅣ期に区分されている。いささか煩雑ながら、その流れを以下に追ってみたい。

まず豊臣秀吉によって文禄元（1592）年、指月の丘（現京都府京都市伏見区桃山町泰長老）に屋敷が建造されたのがその始まりである（Ⅰ期）。この時点では、関白職を甥の秀次に譲った秀吉の「隠居所」として築かれたため、さほど大規模なものではなかったと想像される。しかし同2年に淀殿（茶々）が秀頼を出産したことにより、状況は一変する。嫡子を得た秀吉は同3年から伏見城の改築に取り掛かる（Ⅱ期）。この時点で、伏見城を後継者秀頼の城として位置づける構想が秀吉のなかにあったのだろう。このⅡ期伏見城は、慶長元（1596）年に来日することになった明使に、秀吉の威信をアピールするためもあり、豪華拡張が図られた。さらに文禄4（1595）年には関白秀次が失脚し切腹、その城であった聚楽第も破却されたため、以後、豊臣政権の京における政治的拠点は、伏見城におかれることとなる。

このⅡ期伏見城は、贅を尽くした豪華な城郭であったようだが、残念ながら文禄5（慶長元・1596）年の大地震によって倒壊してしまう。

そのため、指月のやや北東にある木幡山（現京都府京都市伏見区桃山町桃山陵墓地内）に場所を移して再建される（Ⅲ期）。このⅢ期伏見城は、慶長2年5月頃には城内の殿舎がほぼ完成したとみられる。同3年8月、秀吉が63歳の生涯を終えたのも、このⅢ期伏見城である。

豊臣から徳川へ

Ⅲ期伏見城は、秀吉没後に徳川家康の所有とな

ったが（秀吉の遺命により秀頼は大坂（阪）城へ移り、伏見城の留守居役に家康が任じられている）、慶長5（1600）年8月、関ヶ原合戦の前哨戦で西軍に攻撃され焼失する。

Ⅳ期伏見城は、戦後、家康によって同じ木幡山に再建された。慶長6年3月頃にはある程度の形ができていたとみられる。

ただし元和元（1615）年の大坂方滅亡とともに、徐々に城としての存在価値は薄れていったらしく、元和5（1619）年には廃城が決定している。

そして、いつのまにかこの地に桃の木が植えられ、一帯が「桃山」という地名を冠するようになり、近代に入ってから豊臣家が政権を所持した時代を「桃山時代」と呼称するようになったのである。

こうしてみると、伏見城が、聚楽第に代わる豊臣家の京における政庁であったこと、そしてその後、家康・秀忠・家光がともに「将軍」宣下をⅣ期伏見城で受けていることからみて、徳川政権にとっても重要な城であったのは間違いない（家光は廃城後の伏見城を、わざわざ一時的に修復してまで、この城で将軍宣下を受けている）。

伏見城は「天下人」の城として認識されていたといえるだろう。

ところで、このように伏見城のおおまかな流れが把握できるようになったのも、近年の研究の成果によるものである。しかし破城が徹底したものであったことや、Ⅳ期伏見城がⅢ期にほぼ重なる形で再建されており混乱が生じていることのほか、Ⅲ期・Ⅳ期伏見城遺構の大部分が、現在、一般立ち入り禁止の桃山陵墓地内にあり、発掘調査ができないため、天守がどこにあったか、曲輪の構成がどうであったか、など各期の具体的なイメージは明らかでない。

伏見城は日本の歴史において重要な城の一つといえるのだが、いまひとつ、つかみきれしていない存在なのである。

描かれた伏見城

京（＝洛）の市中と郊外の名所を描いた洛中洛

外図は、屏風や画帖の姿で100点を超える作品が確認されている。室町時代末期から明治時代にいたるまで描き継がれた画題であり、現存作品数の多さからもその人気のほどがわかる。

ここに紹介する洛中洛外図屏風は、平成22（2010）年秋に初めて名古屋市博物館で公開された資料で、八曲一隻の大型屏風である。伏見から京の東山一帯を遠景として市中（北は祇園社から南は東寺まで）を西北からとらえる。画面中央を鴨川が横断し、五条橋のたもとでは芝居小屋も見える。祇園会の山鉦が街を練り歩き、宴会や猿曳きなど市中の賑わいが描かれている。と、ここまでの描写は洛中洛外図の典型的なのだが、この作品が研究者の注目を集めたのは、画面右上（一扇目と二扇目）に、伏見城を大きく描いているためである。複数の曲輪から成る城を恐らく西北方向からとらえ、巨大な濠とそこに架けられた大きな木造の橋、五重の天主、御殿や庭、石垣を取り囲む馬出曲輪、井戸などが描かれている。

実は他の洛中洛外図屏風にも伏見城の描写がないわけではない。現在のところ、林原美術館本（池田家本とも）・勝興寺本・堺市博物館本など11作品で確認されている。しかし、いずれも画面の右上隅にほんの一部がのぞく程度の描写であった。またこれまでの研究では、これらの伏見城はⅣ期伏見城と考えられてきたきらいがある。

では本作の伏見城も同じくⅣ期徳川期伏見城なのであろうか。

その答えは、城内をつぶさに見ていくことで、得られた。まず着目したいのは、天主より右手に描かれている朱塗りの柱を持つ三重塔である（なお、他の洛中洛外図屏風では、ここまで広い景観は含まれていない）。

実は、伏見城には慶長2（1597）年に大和国比蘇寺より城内に移され、秀吉没後の慶長6（1601）、年家康により園城寺に寄進された三重塔があったことがわかっている。本図に描かれた塔は、おそらくこの比蘇寺の三重塔であろう。この存在により、かなり期間が限定されるわけであるが、さらに、本丸から南側の曲輪に伸びる廊下橋をご覧いただきたい。椀皮葺の屋根の上に瓦葺の櫓が乗る

大変華やかな橋である。ここに桐文が描かれていることに注目してほしい。桐文は本作中の大仏殿（豊臣家造営）にも描かれていることから、この城の主が「徳川家」ではなく「豊臣家」であることを絵師が強調しているのは間違いない。

つまり、本作においては、Ⅳ期徳川期伏見城ではなく、大地震後に再建されたⅢ期豊臣期伏見城を描いていることが明らかになった。

ここで肝に銘じておかなければならないことがある。絵画資料の宿命として、どうしても「絵空事」がつきまとうということだ。つまり、描かれたものイコール事実をそのまま映したものの、とは限らないということである。本作の描写が伏見城の真の姿だ、と判断するのはいささか時期尚早であろう。描かれた内容の示す景観年代（慶長前期か）と実際に屏風が描かれた制作年代（元和～寛永期か）とではタイムラグが生じている可能性も高く絵師の記憶違いもあるだろう。そもそも真の伏見城の姿を描く必要があったかも疑わしい。

しかしそこには、なぜそう描いたか、という理由が必ずあるはずである。それは、作品の注文主や絵師（狩野派系統の工房か）の事情、あるいは当時の需要を反映してのことかもしれない。いずれにせよ、制作された当時における「伏見城のイメージ」がここに投影されているわけである。

本作では伏見城以外にも、大仏殿（五扇上部）、豊国神社（大仏殿の右上）、御土居（鴨川西岸）など、豊臣家が手掛けた事業をとくに目立つように描いている節がある。まるで屏風全体で豊臣の世を懐古するかのようである。

本作がいったい誰のために描かれたのか、何の目的で描かれたのかをはっきりさせるのは、なかなか簡単なことではないだろうが、その探索の過程において「伏見城のイメージ」も浮かび上がってくることだろう。

幸いなことに、平成21（2009）年1月、研究者による現地調査によって、Ⅲ期Ⅳ期伏見城の石垣や堀、天守台が残存しているのが確認された。

まさにここ数年における、伏見城研究の機運は熟している。本作の登場が、謎多き伏見城の姿を明らかにする追い風となることを期待したい。